

国のかたちを考える

社会保障

(1)



政策研究大学院大学教授

黒川 清

ている2大原因は「70億を超える人口爆発（100年前は16億人）」と「インターネットの急速な広がり」である。世界は一体化し、しかも相互依存性はさらに強まっている。

「先進国」共通の五つの悩み

社会保障とその関連政策の「先進国」共通の悩み・困難は五つある。①少子高齢社会の進行②国内経済格差の拡大③生活習慣病を中心とした慢性疾患の増加④公的資金は現在以上には増やせない（EU・日本など国の債務がほぼ限界）⑤強い経済成長が見込まれない、である。

都市化人口の増加と地方の過疎化が進み、格差の広がりは、中央集権的な一つの政策では対応しきれなくなっている。わが国で言えば、自由民主党による平成元年のバブル経済崩壊までの数十年の経済成長の下でガッチリ構築された「政産官、鉄のトライアングル」支配の社会構造は、これが一見して成功していたばかりに、グローバル化への対応がきわめて遅く、経済成長も社会構造改革も進まず20年が経過した。2009年から民主党政権になって、与党も野党も、政治の弱体化は目を覆うばかりである。それが「3・11」の国難で世界に丸見えになった。

国家の信頼が急速に失墜しつつある。対応によっては、増税、国債発行など、経済の低迷とあいまって金融崩壊にならないとも限らないというまで迫り込まれている。

黒川 清（くろかわ・きよはる）

東京大学名誉教授。東大医学部卒、医学博士。1969―84年在米、79年UCLA教授。89年東大教授、96年東海大学医学部長、日本学会議会議長、総合科学技術会議議員、内閣特別顧問などを歴任。

（写真：佐久間哲男撮影）

社会保障制度は教育、医療政策などとともに、国民一人ひとりが直接かわる共通の社会資本的国家政策の根幹である。これらの社会制度のほとんどが、経済の発展とともに主として日欧米で20世紀にその基本が出来あがった。しかし、これらの制度は2度の世界大戦で大きく崩れ、また新しい経済成長とともに、再構築されてきた。

科学技術の進歩で急速な変化

この20世紀は科学・技術・工業・情報・金融などのあらゆる社会の分野で急速な科学技術の進歩を背景に私たちの日常生活のあり方をすっかり変えた。20世紀前半の二つの世界大戦に比べ、後半の50年は冷戦構造のもと、1991年のソ連の崩壊まで、世界は比較的落ち着いた緊張関係にあった。冷戦終結後10年はグローバル化のバックス・アメリカナ（Pax Americana）の様相であったが、21世紀とともに「9・11」、BRICS、特に中国、また、この数年の中東新興経済の台頭とともに、新しい世界バランスが構築されつつあった。

しかし、2008年のリーマンショックから世界の様相は一変し、その後の2年は中国などがグローバル経済の牽引車になる一方で、この数カ月の中東ジャスミン革命、EU金融危機、東日本大震災とフクシマ「3・11」と、世界を揺るがす大事件が立て続けて起こっている。グローバル世界を支配し

グローバル化遅れ、社会構造改革進まず